

様式 6

6 荒三峽小第 1 6 5 号
令和 7 年 2 月 2 5 日

荒川区教育委員会
教育長 高梨 博和 様

荒川区立第三峽田小学校
校長 福留 正也

学 校 関 係 者 評 価 報 告 書

令和 6 年度の教育活動の評価結果及び改善方針について、下記のとおり報告します。

記

評価項目 1 「学校全体の様子」
教育目標・方針 児童の「よくあてはまる」は前年度比 16.4%増加。チーム三峽としての努力が成果を挙げている。 児童・生徒の様子 児童・保護者共に肯定的評価が 90%以上を保った。傾向としては良好と判断した。 基本的生活習慣 肯定的評価は児童、保護者ともに昨年の水準を保持できた。 児童・生徒理解 肯定的評価が児童、保護者ともに肯定的評価が高くどちらも 87%を超えた。 健康・安全・安心 ほぼ昨年と同じ水準であった。引き続き安全で安心な学校づくりを進める。
評価項目 2 「学力向上の取組」
分かる授業 児童の「よくあてはまる」は前年度比 8.9%増加。今後もわかりやすい授業づくりを進めていく。 個に応じた指導 肯定的評価は児童、保護者ともに昨年の水準を保持できた。 学習習慣 児童の「よくあてはまる」は前年度比 8.6%増加。今後も学習習慣の定着を図っていく。 情報教育 保護者の「よくあてはまる」が前年度比 8.9%減少。T P C の良さを生かした教育活動を進める。 学校図書館の活用 保護者の肯定的評価が前年度比 10.3%増加。これまでの取組が保護者に理解されつつある。
評価項目 3 「社会性・人間性の育成」
人権教育 児童の「よくあてはまる」は前年度比 9.3%増加。教員の指導が成果を挙げている。 道徳教育 肯定的評価は児童・保護者とも 86%越え。他の教育活動との関連付けを今後も意識していく。 教育相談 保護者の「よくわからない」が前年度比 6.9%増加。取組を学校だより等で説明していく。 人間関係づくり 児童・保護者とも肯定的評価は高い。本校の良さの一つととらえこれからも努力していく。 自治的な活動 児童の肯定的評価が 12.7%増加。校内研究の成果が実を結びつつある。

評価項目 4 「保護者・地域との連携」

情報発信

児童・保護者ともに微減。学校だよりやHP以外のツールで発信することを検討する。

相談への対応

保護者の肯定的評価が9.9%増加。今後も必要な時に相談できる体制を作っていく。

学校への参加

児童・保護者の肯定的評価がともに94%を上回った。今後も魅力ある取組を実施していく。

地域との連携

児童の「あまりあてはまらない」が14.9%。引き続き地域との連携を工夫・努力する。

意見の反映

保護者の否定的評価が7.3%減少。保護者の声に応える取組を今後も行っていく。

評価項目 5 「特色ある教育活動」

主体的に学ぶ姿勢

児童の「あまりあてはまらない」が13%。引き続き校内研究を通して改善を図っていく。

体験学習

保護者の「あまりあてはまらない」が20%。活動内容を積極的にHP等で発信する必要がある。

協働学習

児童の肯定的評価が90%。日頃から話し合い活動を行っていることが成果につながっている。

読書活動

児童の「全くあてはまらない」が14%。読書嫌いの児童への対応を今後も行っていく。

異学年交流

児童・保護者の肯定的評価が90%を超えた。小規模の本校の特色として力を入れていきたい。

評価結果を受けての学校の改善方針

学校評価アンケートの結果からは、おおむね児童・保護者・教職員ともに良好な学校運営がなされていると考える。コロナ禍で一時期落ち込んだPTA活動も今年度はコロナ禍前に戻った。一方で町会活動は低迷している。総合的な学習などをとおして地域との連携を深めていく。

学校評価アンケート結果とともに「iチェック」や「読書活動についてのアンケート」は興味深い。児童は高学年になるにつれ、学習にまじめに取り組むことに嫌悪感をもつようになる。その意味で、高学年になるにつれ、自己肯定感が低くなる傾向にある。この結果がそのまま本校の児童の本心ではないと考える。本校児童は理想的な発達をしているとの認識のもと、学力もしっかり向上できるように取り組む。

「学校が全てを背負う時代は終わった。これからは地域や家庭と協力して児童を育てていく。例えばSNSの発信は、得意な担当者が異動することで回数が減ることが予想できる。地域にいる得意な保護者に任せるなどの方法で進めていくことが大切といえる。」との学識経験者から情報発信の改善のヒントを得た。来年度にむけて情報教育担当を中心として改善していく。

読書活動は大切であるが、一定数苦手意識をもった児童が存在する。読書のよさを伝え続けることも重要であるが、自発的に読書に取り組ませる必要がある。今後も学校司書と連携して児童にとって身近な図書館を有効活用し、一人でも読書が好きな児童を増やしていく。

令和5年度から「学びのハンドルは自分が握る」を研究主題として研究を行っている。アンケート結果から徐々に成果が表れてきている。来年度以降も継続した取組を行う。